第５回特色ある県立高校づくり懇談会
議事録

高校教育課

【事務局：今井高校改革推進役】
　それでは、若干定刻を過ぎましたけど、ただいまから「第５回特色ある県立高校づくり懇談会」を開会いたします。会議の進行を務めます長野県教育委員会高校教育課高校改革推進役の今井です。どうぞよろしくお願いします。開会に当たり、長野県教育委員会の内堀教育長からあいさつを申し上げます。

【内堀教育長】
　皆さんこんにちは。ご多用のところ、第５回の本会議にご出席いただきましてありがとうございました。これまで４回にわたって、それぞれの構成員の皆様の知見ですとか経験に基づく様々なご意見を頂戴いただき本当にありがとうございます。今日はこれまでいただいたご意見とそれに対する県教育委員会の現時点の考えというものを示させていただいて、それをもとに今回で最後でございますので、言い残しがないように活発な議論いただければと考えております。
　第１回の会議の冒頭で申し上げたことを振り返りたいと思っております。冒頭でこんな話をさせていただきました。今般の高校改革はその骨子を示した平成29年策定の「学びの改革基本構想」、それから１年後にそれをより具現化して決定した「高校改革夢に挑戦する学び実施方針」に基づいて進めていると。平成30年の実施方針の策定から当時で５年弱、今では６年弱経過したけれども、その間VUCAと言われる変化が激しく、予想困難な時代にあって新型コロナウイルス感染症の世界的拡大やChatGPTをはじめとするAI科学技術の急速な進展などの大きな社会的変化が起き、また、今後５年間の教育委員会の大きな方向性を示した教育振興基本計画をこの３月に策定したところであると。こうした状況の中で広い県に様々な高校が存立する長野県にあって、学校の一層の魅力化、特色化について、様々な立場の有識者の皆さんから幅広く御意見を頂戴するため懇談会を立ち上げました。この懇談会は、会として何か取りまとめをしていただくというようなことは考えておりません。皆さんからいただいた様々なご意見を教育委員会で受け止め、整理をし、知事部局と連携の上、方針として取りまとめ、現在進めている新校ごとの懇話会での議論、あるいは既存校の特色ある学校づくり、それからさらには予算要求、そういったものに繋げていきたいというように考えている。こういう話を申し上げました。それに基づいてご議論いただいてまいりましたので、本日は、その方向に沿って我々の考えを示しながら、更なる議論をしていただければありがたいというふうに思っております。よろしくお願いいたします。

【事務局：今井高校改革推進役】
　次に本日の出欠状況の報告をいたします。ＫＯＡ株式会社の向山取締役会長、株式会社ナイアンティックの野村クリエイティブディレクターは、欠席でございます。また、信州大学の荒井准

教授はオンラインでの参加となります。さらにオブザーバーの阿部知事でございますけれども、あと25分後に到着予定いうことでございます。

意見交換に入ります前に、本懇談会の公開について説明をいたします。

本懇談会につきましては、会議を公開で行いますとともに、会議資料及び議事録、撮影した写真等につきましては、県のホームページ等へ掲載するとともに、希望される構成員の皆さんへ写真をご提供しますのでご承知おきをお願いいたします。

また、懇談会の模様をライブ配信するとともに、議事録を作成するために、録音をさせていただきます。併せてご承知おきいただきますようお願いいたします。

次にお配りいたしました資料の確認をいたします。お配りいたしました資料は、「次第」、「配席図」、「第５回配布資料」さらに白馬インターナショナルスクールの堀井構成員から、「長野県　県立高校の特色化」についての資料、株式会社の向山取締役会長から、「特色ある県立高校づくりに関する意見」ということで資料をいただいておりますので、お配りさせていただいております。ご確認をお願いいたします。

それでは会議事項に入ります。進行は本懇談会座長の信州大学村松教授にお願いをいたします。それでは、よろしくお願いいたします。

【村松座長】

先ほど内堀教育長からもお話ありましたが、ここまでの議論を踏まえての最終回ということですね。ぜひ、構成員の皆様におかれましては、言い残しがないように思いのたけを出していただければと思います。よろしくお願いします。

それでは本日のテーマでございますけども、これまで出された主な意見と県教育委員会の考え方ということでございます。まずは事務局から資料説明をよろしくお願いします。

【事務局:宮澤高校再編推進室長】

「第５回目配布資料」、「向山構成員提出資料」、「堀井構成員提出資料」に基づき説明

【村松座長】

はい、ありがとうございました。それでは具体的な討論、ご意見等入る前に、今の説明につきまして何かご質問等ございますでしょうか。

【岩本構成員】

簡単な質問になってしまうのですけど、懇談会の意見を受けての県教育委員会の考え方というところに、すぐに取り組みたいと考えているものとありますが、それは、いわゆる令和６年度の予算の中でやるものということで、それ以外のものは、今後、令和７年度の当初予算に向けて教育委員会と知事部局で議論されるという認識でよいですか。

【村松座長】
　事務局の方いかがでしょう。

【事務局：宮澤高校再編推進室長】
　個別に予算が確保できているものといないものがございますけれども、私どもの思いとして、皆様方のご意見を受けとめて、お示ししたものについては可及的速やかに実施したいと考えているものでございます。

【村松座長】
　今のお話だと、個別の予算がもう既に見通しが立っているものとそうでないものもあるということですが、この中で具体的に予算目途が立ってるっていうものを教えていただけると話がしやすいかと思います。

【事務局：宮澤高校再編推進室長】
　予算を必要とするものに限っての説明をさせていただきますけど、「地域連携コーディネーターの増員」と「偏差値以外の選択肢」「高校からの情報発信」につきましては、事業化をいたしまして、予算を確保いたしました。

【村松座長】
　はい、ありがとうございました。
　今ご説明いただいた２点については、もう既に予算も確保ということですね。特に地域コーディネーターもつくというのは非常に大きいかなと。その他どうでしょうか。関連するご質問等はよろしいでしょうか。
　それでは、議論の方に入っていきたいと思いますけども、大きく分けて先ほどご説明した３つの項目がわかれておりますので、まずは各項目ひとつずつ、そして残ったところで、全体的な議論等できればと思っております。
　まず、これからの時代の高校の姿とそのための体制づくりですね。いかがでしょうか。はい、小木曽様よろしくお願いします。

【小木曽構成員】
　坂城高校の小木曽です。
　これからの時代の高校とそのための体制づくりというところ以外でも発言して大丈夫でしょうか。

【村松座長】
　ぜひお願いします。

【小木曽構成員】

資料２ページの一番下のところで「学びの保障として中山間地校」の話で、中山間地校のニーズは多様なので１つの学校の中でその多様性に対応することが必要であるという話題が上がっていたと思います。教員の役割も変わってくるっていう話もある中で、ICTの発展であるとかいろんなことによって、教員があまり必要ないのではなかという雰囲気を感じる部分もあるのですが、自分は逆に多様なものに対応しなければならないし、今までと違って生徒１人１人の学びとか生き方をデザインしてあげるような役割が教員に必要になっていて、今の教員の数よりも必要になるんじゃないかなと思っています。

それはまた、都市部で高校が固まっているところと、逆にあまり高校がない中で選択肢が狭く、そこに行かなければならないという環境の学校では状況が違うと思っています。今自分のいるところが中山間地、多様なニーズを抱えている学校と思うんですけど、そこに対応するため、また教員の役割が変わってきてるっていう部分では、教員の価値がもっと高まると思いますし、もっと教員の数が必要であるかなと思います。もっといればもっとできるのにと思いますが、どこに言ったらいいか分からず、言い残していたので、お金も関係するので大きな話かと思いますが、良くなればと思って発言をしました。

【村松座長】

はい、ありがとうございます

今最後の３点にもちょっと関係するところだとは思いますけども、教員が本当にAIとか遠隔などが発展する中で、教員自身がいらないというより役割が変わっていくんではないかと、そういった新しい役割を踏まえて教員の配置、そしてもちろん増員の話が必要なんではないかということですね。

関係したところでいかがでしょうか？伊佐治様、はい、お願いいたします。

【伊佐治構成員】

前回、前々回と欠席してしまい申し訳ありませんでした。

今お話がありましたけれども、教員の数をもう少し拡充すべきじゃないかというご提案だったかと思います。それに関連してということで発言したいんですが、先日、年明けの新聞で、私立の通信高校の入学者が今年もまた増えているということで、ここ数年千人単位で入学希望の方が増えているという記事でした。

どうしてそこがそれだけ選ばれるかという理由の分析がなされていましたが、２点書かれていました。

まずは好きなことをとことん学べるということと、それから集団での学びが苦手な生徒に対して、個別に丁寧に対応していくというところが選ばれているのではないかという分析でした。私立の役割として、そういう隙間のところをどんどん埋めて、個性を出す高校さんが増えていくと

いうことは良いことですし、そこを公立がわざわざ全て真似をするということは必要ないと思うのですが、でもこの２つが子供たちに選ばれている理由になるとすれば、県立高校もそこのところを大切にしていかなくてはいけないと思います。

いくつか皆さんから出た意見を拝見してきたのですが、長野県の地理的な状況を考えると、県境や中山間地でそこの学校しか選択肢がないというような通学に支障があるお子さんに対しては、徹底的にオンラインで学ぶということを大胆に考えていったらどうかということが一点です。

それからもう一つは、集団での学びが苦手なお子さんいついては、通信を選ぶ方の中にはそういう方もいらっしゃると思うのですが、通信だけではなくて、リアルな学校も例えば週に３回とか通って、それが何日でも自由に組み立てればいいと思うのですが、そのときには先ほど小木曽先生がおっしゃったように、リアルなところでは先生がそのお子さんの学びたいことにトコトン寄り添って生きる力をつけていくことができるっていうことができればいいのではないかなと思っております。

【村松座長】

ありがとうございました。

今いただいた通信制高校のニーズが増えてきた背景に好きなことをトコトン学べるようなこと、それから個別の丁寧な対応、こういうところがやっぱり理由ではないかと。それを100%県立高校でやるっていうわけではないけど、県立高校でも、そういうものを大切にする必要性があるんではないかと。

そのためのご提案として、この通学に支障があるような子たちに徹底的にオンラインを活用するという方法。それから通信のみではなくリアルな学校も一方で必要ではないかというそんなご意見だったかと思います。

私も今お話を聞いて非常に賛同するところでありますし、昨今ですと全国的にも通信制で広がってる高校もありまして、そこのとこで活躍しているうちの卒業生もいますが、大きく今動き出してるのが、拡大するとともにリアルなキャンパスも併用してやっていくと。オンラインの活用は本当に重要なんですけども、やっぱこのリアルな学校というのが、軸としてもう一つ必要で、なかなかオンラインだけで全てっていうのは難しいだろうというのはご指摘のとおりで、実際関係の高校さんでもその辺を議論してるところかなと思います。ありがとうございました。

続きまして安原様、お願いできますでしょうか。

【安原構成員】

塾をやっている安原です。私は個別塾をやっていまして、今のお話をお聞きして、私のところにも集団授業に馴染めない子が来ます。もちろんそうじゃない子もいますが、それがすごく増えてるなというのを感じながらお聞きしていました。

どういう体制がいいかわかりませんが、一つ私からやはり提案したいのは、フリースクールと

か、あるいは塾とか予備校とかの活用もあるのではないかと。それを妨げるものとしては、正直、問題点が塾業界側にあると思っています。簡単に言えば節操がない。学校との連携を図ろうにも、あまりにも塾や予備校は、利益のために客である生徒をかき集め、そして自分たちの成果であるかのように・・・と、ちょっと話が関係ないので省きますが、いろんな問題あるけど、そこをもっとすり寄せながら、学校側が塾側に対し要望を出してもいいと思うし、塾側も協力したいという人はたくさんいると思いますので、考えていただければと思います。

その教師の話を小木曽さんがされましたので、それについてちょっといいですか。５回の会議で勉強させていただきまして、何となくですが、改革には内向きの改革と外向きの改革があるなと感じています。悪い意味ではなくて、まさに文字通り、内向きと外向き。

内向きはやはり、私は教師の待遇改善ということを第１回で申し上げたと思うんですが、そこに尽きるかなと思います。なんだかんだ言って、高校に対して求めるものは、生徒たちも、中学生たちも、保護者たちも、やはり先生が良いということが一番だと思います。公立高校というのはそのエキスパートたちが集まっている。その人たちが輝ける場所を作るというのが大事だと思ってます。

待遇改善というのは、前に言いましたが、今、我々から見ると、すごく高校の先生が萎縮してるんじゃないか、自由がないんじゃないか、疲弊してるんじゃないかというのを勝手に感じます。そうじゃないかもしれないけど、保護者の方からのいろんな意見とか、あれしてはいけない、これしてはいけない、と言われる。そういうときに、例えば、教育委員会が長野県は教師を守ります、と。だって教師が宝なんだから、まさに教師が売りなんだから、彼らを守るという形で高校専用の法テラス的なものを整理したり、何かそういうことを考えていただいてもいいんじゃないかなと。

その代わり、もちろん、外向きには、教師が売りですということだから、ただ体制を改善されたんじゃなくて、高校の先生にはもちろん良い授業をしていただきたいと思っています。皆さんもそうだと思いますが、昔は名物教師というのがいたと思うんですね。どの学校にも。私も覚えてますが、ものさしで叩かれもしました。だけど、すごく良い授業をしたり、熱かったのを覚えてます。今回授業を参観する機会もあったんですが、ちょっと、やっぱり何か自由度がないのかなと。本当に良い授業をされてるんだけども、もっともっと個性があって、もっともっと自分の自由に、先生が輝ける授業をしてほしいなと感じは感じました。

その点に関して、ちょっとICTのことも言わせていただきますと、授業を拝見したときに、みなさんそれを活用してたのですが、中には、例えばチョークをカツカツ書きながらやりたい先生も人もいると思います。それは、その先生の選択で、もっと自由に、私はカツカツやりたい、私はICTを十分活用して分かりやすいようにしたい。それを選べる自由も当然あっていいと思います。

生徒のことでついでに言いますと、私のところに来る高校生は、タブレットを持っています。それを学校で使うと言います。タブレットを使った授業は分かりやすいかと聞いたら、分かりやすい授業は分かりやすいと言ってました。でも、これを上手く使えない先生の授業は正直分かり

にくいと。あと、気になったのは、学校で配られるチャートなんか全部タブレットなんですね。課題も全部タブレットでやる。答えもタブレットだから、タブレットで問題を見て解いて、タブレットで答えを確認するんだけど、やりやすいかって訊いたら、正直やりにくいと言っていました。

もちろん、ICTは必要だと思います。確実にその波は来てますし、生徒たちの学校教育に必要だと思いますが、やはりケースバイケースというか、うまく活用できることはして、全てが一律にICT化でなくてもいいと思います。いまの高校生の子たちは、そもそもペーパーの方に慣れている者も多いと思いますので、従来のものを活用することも大事じゃないかなと思います。

本筋に戻りますと、内向きの改革としては、教師の待遇改善です。これが改革の目玉となるような、長野県は教師が売りですと、他県の人たちが長野県の教師になりたい、長野県の塾や私立の高校の先生もできれば公立の先生になりたいと思わせるような、そんな改革になればいいんじゃないかと思います。

【村松座長】

はい。ありがとうございました。

冒頭の所で言っていただきました、馴染めない子どもたちが増えているという話、フリースクール、塾等の活用ということです。先ほどの通信制の話もそうだと思うんですけれども、今までの高校と違ったベクトルのところのコミュニケーションや、連携、やり取りが必要だというふうな点では非常に今後必要、大事な点かなということで今お話をお聞かせいただきました。

教員の待遇改善の話っていうのは、私の今の教員養成の立場でも、本当にひしひしと感じているところではございますけれども、そういったものに向けてこれからどのように進めていけばいいのか、そういった具体的な方策もあるかと思います。法テラスのお話もありましたけれども、これは後で事務局の補足をいただければ。例えば、スクールロイヤーとか、多分そういったようなことを県の方もご対応いただいているかと思います。先生方が過剰な要求ですとか、こういったものに対して、心配なく対応できるような体制ですね、そういったものも後で補足いただければと思います。

最後に先生方の指導にも自由度があった方が良いのではないかというようなお話をいただきました。

事務局の方で、今のスクールロイヤーについて補足がありましたら、いかがでしょうか。

【事務局：志津高校教育課長】

高校教育課長の志津と申します。よろしくお願いいたします。まだちょっと先生方には気楽に使えるというようなスクールロイヤーという制度は県では構築されておらず、今そういったものについては検討中ではございますが、学校で起こった弁護士相談が必要なものについては、当課の方にも学校から相談があり、法的専門的な知識については、そういったものも入れながら、問題解決に向けては努力しているところでございます。

【村松座長】

ありがとうございます。今、市町村単位でそういうことを進めているところもございますし、大学の場合ですと顧問の弁護士の先生がいまして、何か学校で起きた案件で専門的な知見が必要なときには相談できる。そうすると、かなり学校現場の先生が安心して対応できるという状態、これについても、是非、いろいろ展開できる、先生方を支える仕組みとしても、ご検討いただければと思います。

はい、どうぞ。

【内堀教育長】

今、村松先生がおっしゃったのは多分義務教育のことだと思うんですけど。今、市町村立の学校にスクールロイヤーを派遣できるように、先月、県の弁護士会と連携協定を結びまして、市町村の教育委員会から要望があった場合に、その仕組みの中で教員だけで対応しなくてもいいように、すでに、今日もお見えになっていますが松本市とか長野市ではその仕組みがあるんですが、それ以外の所はなかなかなかったんですが、その仕組みで、そんな形を進められます。それから、高校については志津課長が言ったとおりで、スクールロイヤーといって何かつくっているという訳ではないんですけれども、弁護士に相談できる仕組みは持っているということです。

あと、やっぱり今、安原さんから教員になるなら長野県でみたいな感じで言っていただいたのは大変ありがたいなと思っていまして。働き方改革も、オンラインでの参加ですけど、荒井先生を座長に様々なことを進めていただいているんですが、その中で来年度は、義務の方なんですけれども、そういう専門家を学校の中に入れて、その専門家の知見だとかを活用しながら、なかなか教員だと当たり前だと思ってしまっていることを違う視点から分析してもらったり、支援してもらったりしながら働き方改革を一層進めていくための予算もとりましたし、それから、もう一つは、さっき言ったように教育委員会が教員を守ると言いますか、教育委員会が学校だけでなかなか働き方改革が進んでいかないもので、こういうのは学校ではやりませんとか、あるいは地域の協力を得てやっていきますっていうことを、共同宣言みたいなかたちで発出するということを想定しながら準備を進めているところです。そんなような、いろんなものを使いながら、長野県の教員になりたいという人たちが増えるように頑張っていきたいと思っているところです。

【村松座長】

ありがとうございました。

スクールロイヤーの話、それから働き方改革への専門家を投入することで先生方が自由に様々な指導ができる、その前提のですね、セーフティネットだったり、環境整備というのも準備いただいているとのことでした。ありがとうございます。

ここまでいただいたお話を見ると、この３つの内容の順番にというよりも、かなり相互にリンクするご意見等があるようですので、特に、１、２、３というように区切らずにですね、全体をとおして進めていければということで、ちょっと変更をさせていただきます。

では、今ここまでの話に関係したところ、それからまた新たなご意見等でも結構でございます。いかがでしょうか。

はい、石坂様、お願いします。

【石坂構成員】

長野県PTA連合会、石坂と申します。

今、小・中学校で不登校の子どもがとても増えていて、あと、PTAの方でアンケートをとったんですが、子どもが学校に行きたくないといった場合どうするかという、親に対してのアンケートをとった場合、概ね、それは認めていこうよっていう、行きたくないっていうなら行かないっていう選択肢もありだよねっていうことで、昔よりは別に学校に行かなくてもいいんだよっていう考えの人が多くなったっていうのもあるとは思うんですけど、保護者としては小中不登校の子が高校に行けるのか、行かないとなったときに、やはり、保護者としては高校には行った方が良いよねっていうふうになるんです。

私の知り合いでも、不登校で今回高校を受検をした子がいますが、定時制に行くのか、通信制に行くのか、全日制に行くのか、とても悩まれた方がいて、小中で学校に行ってないのに、高校に突然行けるかいうと、やはりちょっと難しい。だけど、通信制で、家でやっていけるかというとそれも難しいっていうことで、週に１回登校があるという通信制の学校を選ばれました。そういう子たちもたくさんいると思うので、そういう子たちへの対応っていうのも大事かなという風に思います。

小学校の方なんですけど、長野市でSaSaLAND（ササランド）という施設ができまして、それは不登校の子を受け入れるという学校で、今ちょうど始まるところです。給食も出すし、送迎バスも出すっていうふうに、広く受け入れてやっていくっていう施設もあります。高校は義務教育ではないので難しい面もあると思うんですけれど、そういう子にもちょっと理解を示していただけるといいなと思います。

うちの子も小中はずっと支援クラスで、たまたま好きな分野で高校に行って、高校では上手くやっているんですけど、小中にあった特別支援クラスっていうのはもちろん高校にはないので、何か相談したいときにどの先生に相談すればよいかというのが保護者も子どもも分からないということになってしまいます。大学はおそらく、そういう子に対応する部署があったりすると思います。支援部みたいなものがあると思うんですけど、そういうのも高校にあればいいかなとというふうに思います。以上です。

【松村座長】

ありがとうございました。

小中不登校の子が最後の進学段階で非常に迷われるということは、本当に理解できるところでございます。そういったような形で、そういうような支援体制をどのようにしていくのか。先ほどお話が出てきましたが、フリースクールとか、通信制高校というものの連携というのも一つかと思いますし、これは非常に課題等があるかと思います。もし、支援体制の方で、事務局の方で補足することございましたらお願いします。

【事務局：志津高校教育課長】

まず、発達特性等のあるお子様が入学されたときのことということで、今、全ての県立高校では特別支援コーディネーターというものが配置されております。全日制でも、通信制でも、高等学校における特別支援教育のあり方というのは、特別支援教育課とも連携をとりながら、どういう体制がいいか、また個別の支援計画、それも小中からの繋ぎですとか、ドクターですとか、様々な方たちを入れて、そういうものに個別に対応するような体制がとられておりますので、もし、そういうようなご不安があるお子様がいらっしゃったときには、そういうことができるように学校でも努力はしているところでございます。

不登校生につきましても、不登校生が入学したときも小中からの連携も大事にしながら、その子に対してどのような支援をしていくことができるか、そこはまた個別の対応ということで考えているところでございます。

【松村座長】

よろしいでしょうか。

今いただいたように、全県立高校で特別支援コーディネーターが配置されているっていうのはですね、先ほどのスクールロイヤーの話もそうなんですけども、こういった取組をいろいろしてるということを、なんかもっと積極的に県の方でも情報発信いただけると、今いただいたようなことに対して保護者の方が安心したり、また高校との信頼関係にも繋がっていくのかなと感じました。

ちなみに、いただいたお話で大学だとどうかと言いますと、学生支援課というのがございまして、そこに専門の方がいまして、特別な配慮を要する生徒への支援をしています。ちょうど、今年度ですね、私どもの学生が学生たちのプロジェクトに学部で予算を出して支援しているんですけども、その中で、なるほどって思ったのが、高校なんですけど、病院で長期入院の子たちのサポートということが難しい、院内学級というのは小中とかはあるんですけど、高校になったときにサポートがなかなかなくてということで、学生たちが支援をしたなんていうことがございました。もし、そんなあたりで補足等あれば。県の方でもこれだけやってるというアピールをしていただけると。

【事務局：腰原主幹指導主事】

学びの改革支援課の腰原と申します。今のお話ですけど、本課の方で、長期入院者等の生徒に対して、いま課として支援を行っております。外部の方にお願いしてコーディネーターとして入っていただいて、あと学校の先生方、関係者、それから保護者、あと病院の関係者も交えて、オンラインが主になりますけど、そこで打ち合わせをして、あらかじめ相談等しながらどんな形で生徒に対して支援をしていくのがいいのかっていうところについて検討して、一番良い支援の形でその生徒の学びを保障していくと、そんな取組を今行っているところでございます。

【村松座長】

はい、ありがとうございます。こちらもかなり手厚くというか丁寧にご対応いただいているということで、これもぜひまた、どんどん発信いただければと思いました。

では、鳥谷越様よろしくお願いします

【鳥谷越構成員】

蟻ケ崎高校鳥谷越です。初回の議論をもう一回思い出したのですけれども、さきほどの石坂さんの発言もそうなのですが、実は、高校のやっていることっていうのは、本当に精一杯いろんなことをやっているんです。それが、やっぱり見える化されていないということがものすごく残念なことなんだなということをこの会に来て特に思いました。自分たちはこれだけやっているっていうのを私達現場の人間からすると、なんか当たり前のようにやってきて、周りはもう分かっているもんだっていうような認識もあったのですけれども、これだけ知られていなかったっていうことが、改めてここに来て分かったっていうのもあります。

先ほどの発達障害の支援も、小中と支援計画にしたがって、丁寧に高校はやっています。前にもありました、それぞれの高校のホームページの発信もしているのですけれども、なかなか見づらかったりとか、見にきていただけなかったりとかっていうのがいろいろあって、やっぱり、そのへんの高校の活動の見える化みたいなものが一覧で、皆様にお知らせできるような、そんなシステムであったり、そういうことがとても必要だっていうのは、特にこの会に参加してから私も思ったところです。以上です。

【村松座長】

ありがとうございました。本当に今いただいたように、学校現場はいろんな声、いろんなニーズ等に応えながら、様々やっていただいて、先ほどお話あったような特別支援の話ですとか働き方改革の話、不登校対応も、いろいろやっていて、なかなかそれが一般に見えてこないですね。これはぜひ、何か非常にもったいないというか、新しいことを始めるっていうだけじゃなくて、実は知られてないけど既にこうしたことをやっているっていうことを伝えるっていうこともとても大事なことと思いました。

これ今、お話を聞いていて、今回の第４次教育基本計画の議論の中で、それまで割と厚めの報告書でやっていただいていたんですが、それをスパっとを切り替え非常にわかりやすいリーフレ

ットのようなものを作成していただいて、これは非常に素晴らしい出来栄えだったかと思います。ああいうような形で、何かをやっていることが伝わる、従来のような伝え方ではなくて、もっともっとこれだけ学校現場にしても教育委員会さんにしても、さまざまやっていることっていうのが出ていくと、もう少し、議論の方向感が変わってくるんじゃないかなっていうのは感じます。そういった広報の話もまた、深められたらと思います。ありがとうございました。

どうぞ、岩本様お願いします。

【岩本構成員】

はい。ちょっと話が戻ってしまうのかもしれないんですがこの３ページ目ですか、県教育委員会の考え方のすぐに取り組みたいと考えているものの１のところに関してなんですが、一つ目が地域連携コーディネーターの増員ということで、これ非常に望ましいというかですね、ぜひと思って今日、聞いていたんですけれども、まずここに関しての注意点です。

私もこれ全国で見ていてですね、コーディネーターを配置すればうまくいくかということですね、必ずしも人を入れたぐらいでですね、大抵うまくいきません。なぜ多くのところで入れてもうまくいかないのか、もしくはうまくいっているところと何が違うのかっていうところで見ると、まず、コーディネーター本人の話とそれを取り巻く環境の話、両面あります。

まずコーディネーターのプロフェッショナリティーを持った人が必ずしも配置されていないと。当然だと思うんですけど、高校と地域を繋ぐということをそれなりにやってきた人たちっていうのがそんなに、おそらく長野県にいるわけではないと思いますし、なので、この分野におけるコーディネーションの素人というか、経験がない人が配置されるっていう状況が大抵おきる。

もう一つは、受け入れ環境側がこの人どういうふうに使っていいのかよく分かんないとかですね、学校側にもその受け入れ体制がないですし、繋ぐ先の地域と言ったときに、地域にもそのレディネスがなく、そこに人をポンと入れて、じゃあやってくださいっていうケースであまり機能しないとか、その人がメンタルになってしまうとかあります。これ、教員の場合であってもそういうイメージすればわかると思うんですよ。

コーディネーターの育成のシステムって、多分、長野県はないと思うんです。コーディネーターをどう育てるのかとか、なった人たちの学び合いってどうやって作っていくのかとか、その人の評価をどうしていくのかとか、メンターって誰かいるんだろうかとか、普通に入れるとそこで孤立していくとかですね、その人が受ける研修もなければその人を活躍させるエコシステム、環境ができていないところに人だけ入れるっていうことをやってしまうと、大変危険ですので、入れる中でですね、そういうコーディネーターに、例えばですよ、コーディネーターにやっぱりちゃんと七つ道具を渡してですね、それを使えるようにちゃんと研修をしていくとか、多くが相談できる人がいない感じになると思うので、横でちゃんと繋ぎあって学び合いだとか、やっぱメンタルのことも含めてメンタリングをする仕組みだとか、あとは、県立高校側の受け入れ側にも研修をちゃんとしていくだとか。どうやってこの人を生かすべきなのか、誰がこの人を評価や育成をするのか、責任を誰が持つのか含めてもそうですし。あと地域側と高校の協働体制自体を構築

していくという人がいれば繋がるというだけではないので、そういったところを教育委員会側からちゃんと何らかの形で担保していくとか、伴走とかっていうことをしていかないと、人だけ増やして、はい入れました、あとは学校でよろしくって言うのは危険ですので、ここら辺そういった予算とか取れてないと思いますけども、今後入れるにあたってちゃんと機能させるところまで責任持って予算とったりしながらやらないと、うまくいかないリスクがあるということがコーディネーターに関してです。

あともう一つのこの全国募集に関して、これは長野県さんの場合どうかわからないですが、他県でこういった状況をいろいろ見ていくと、全国募集やるときの一つのボトルネックって受け入れ環境、住まいの問題が大抵ボトルネックがなくなっていくと。これ、寮があったりとか寮を新設するとか、そんなことができればすごいですが普通そんなこともうできないと、そういうときに空き家だとか施設をですね、リノベーションしたりとか、下宿だとかをちゃんと探したりとか、こういった形でですね、ちゃんと外から来た子たちが生活しながら、もしくはその生活を含めて学びながらですね、学校に通うという、そこの体制っていうのをどう作っていくのかっていうのが大体課題になります。これを教員に任せるとすごく教員の当然負担感になりますので、住まい環境だとか受け入れ環境側を構築するときって教育委員会のなかでもその部署横断になりますし、場合には知事部局との話にもなりますし、多くの場合、市町村側との連携協働はかなり大事になってきております。何かやったらいいですよということというよりは、そういうケースをずっと見てきてですね、どうやったらうまくいってるのかっていうことを我々の財団でも今回手引きみたいなものを作り、そういったことをやってきていますので、必要であれば新年度以降そういったところでも何かもしあれば、お手伝いというか、何らか知見の共有とかをできればいいかなと思いましたということで。一旦以上です。

【松村座長】

はい、ありがとうございました。まずは前段の話は地域連携コーディネーターについてということで、まとめてみるとその育成のシステムがやっぱりちゃんとないと、人を入れるだけでは機能しないと、それから受け入れ体制の構築というこの両面があるというふうなお話でした。

まずここにつきましては、もし、事務局の方で地域連携コーディネーターの予算の中でこんなようなことを検討されているとか、あるいは何か現在、お考えになっていることがあれば、お伝えいただければと思いますが、いかがでしょうか。

【事務局：志津高校教育課長】

岩本様ありがとうございました。実は、岩本様にも入っていただきながらまた財団から代理の方も出していただきながら、今年度５回にわたって、どのような形でこの連携コーディネーターを導入していくのかっていうことについては、実はもう検討をしてまいりました。先ほどいただいたようなご意見も参考にしながらですが、現在ではその育成システムのための予算というものがとれておりませんので、その配置のためのお金っていうところは用意しているところですが、

今後やはり配置するにあたりまして、今いただいたような視点を大切にしながら、まずは入れたところについて、効果検証をしながら、今後どのように全県に展開していくかということについては、引き続き検討していきたいと考えているところです。

【松村座長】

ありがとうございました。今のお話を聞いて、多分これ似たような話はそのICTの支援って結構似ているかなと思いまして。私もこの仕事柄、この辺のところをやってみたんですけども、一般的に何かICT支援っていうと、テクノロジーに詳しい方を配置とかって。それはそれでもちろんありなんですけども、ところが一番うまくいった例ですね、県内だと喬木とかその辺がそうかと思うんですけども、教育のこととか授業のことが分かって、かつ、テクノロジーのことが分かるっていう方がやっぱ一番いいですね。

だからそのコーディネーターの先ほど、プロフェッショナルっていうものをどういうふうに定義して、どんな資質能力が必要なのかっていうことが、結構検討が必要なのかと思います。それ自体が大きなテーマにもなるんですね。今までのお２人ですかね、２校でも検証、それからさらに追加でっていうことで増えていくので、そこのところをどううまくやっていくのか。その先のICTの話から、うまくいくことのポイントの一つが、失敗とか逆にうまくいかないことが何かっていうことを共有しておくっていうことで、そういうようなことを日常的に共有できるような仕組みがあるっていうのが、育成のところのまず一歩かな、っていうのは感じました。また、受け入れ態勢を含めて議論出来たらなと思います。

もう１点後半の方でいただきました全国募集のボトルネックは、環境と住まいであるというご指摘をいただいたのですけれども。この辺も多分、整備しているところもあるんじゃないかと思いますけど、その辺の状況もぜひ見える化いただければと思いますが、いかがでしょうか。

【事務局：宮澤高校再編推進室長】

ありがとうございます。この全国募集につきましては、岩本様も関われた島根県での取組なども参考にさせていただきながら、ここに打ち出すにおいては、その内部的に様々な検討、さらに市町村との関わりの中で、県ができること、そういったことについても検討を始めているというところでございます。

なお、既に全国募集を行っている飯山高等学校スポーツ科学科につきましては、県が設置した寮が完備されております。白馬高等学校の国際観光課は、白馬高校の地元であります北安曇郡の白馬村、小谷村の両村にかなりの支援をしていただいていると申しますか、費用負担があるような形での寮運営を行っておりますけれども、やはり持続可能なものにしていくためにどうしたらよいかっていうことをこういった自治体とも一緒に考えていきたいというのが今の教育委員会での立場でございます。

【村松座長】

あと、新たな今出た２校あたりは、何かもし、単純に全国募集をするっていうだけではなくて、それに向けてこんなことを検討しているとか、準備しているようなことがもしあれば。

【事務局：今井高校改革推進役】

はい。今、これから実施を検討する２校につきましては、住まいの環境につきましては、木曽青峰高校には、以前全国募集をしたり、あるいは衛生看護科がございましたので、寮がありますので、それを利用するということで住まいの環境は比較的整えられるだろうという見通しがございますし、また小諸高校の音楽科につきましても、現在全県から生徒が集まっている状況がありますので、民間のアパートですね、非常に献身的に生徒の住環境を用意していただいてるという状況がありますので、これにつきましても先ほど申し上げましたように、島根県の例を参考にしながら、県として、どのようにかかわっていくかということを今検討しているところでございます。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。きっとまだまだ課題はあろうかと思いますけど、現状でも対応できているような部分があるというような、またこれもぜひ募集の際に非常にポイントというお話もありましたので、打ち出すような形でお願いできればと思います。ありがとうございました。

その他の観点、いかがでしょうか。では、小木曽様。

【小木曽構成員】

坂城高校の小木曽です。地域連携コーディネーターのところで、残念ながらこの４校の中に坂城が入ってないんですけども、そうでなくても、探究やいろんなことをやっていく中では、地域連携コーディネーターっていてくれると本当に助かるなというふうに思っているものであります。学校の中で、予算もないのに、本気で頭の中で検討していると、誰っていうのは本当に最初に出てくるようなところで、野沢北高校さんかなと思うんですけど、多分ずっと現役で探究とかを担当されていた方が退職されて、それをそのまま引き継ぐような形で地域連携コーディネーターって枠に入ったというのは、さっき村松座長のまとめの話の中でもあった学校のことをよく知ってるところから間に入った方で、多分そういうのは、どっちかにはやっぱり所属していて、そこにいるっていうと、もう片方とさらにつながる仕事していた方だとより良く、スムーズなのかなっていうのがあります。もし学校だったら教員やっててそういう仕事やってて、退職されるなり、その仕事をシフトするなりだと思いますし、地域にいるならば、地域おこし協力隊とかも含めてですけど、そういう人材が自治体の中で把握されたなかでということかと思いますが、いろいろ探してみてもなかなか見つからない部分があるっていうのが現状で、どういう人がそういう候補になり得るのかとか、コーディネーターを配置するときに学校で探さなきゃいけないのか、何かそういう人材をリストじゃないですけど、こんな方がいるとかっていうのがあるのか、何か

そういった部分が、より良いちょうどの方が、いいときにちゃんとそこに配置されるような、状況になってくれるといいなと思います。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。今、野沢北高校の事例もお話いただきましたが、退職教員の活用というような話、それから後半の話いわゆる人材バンクのようなものが県の方とかも持ってて各校がそれを参照できるようになっていくとありがたい、これは部活の地域移行とかそういうのもちょっと似てるような部分かと思いますけども、我々とか地域に我々が十分把握できてないところでも、地域に実は多様な素晴らしい方がいて、その方をどう繋げていくのかっていうですねそれは本当に大事かなっていうのは思いました。はい、ありがとうございます。

その他、いかがでしょうか。

今の地域の話でいきますと、資料の方でも、本日いただきました向山様のお話で、ふるさと教育っていうのがメインだったんですけど、まさにこの地元のいろんな人たちと関わったり連携するっていう生徒ベースの話だけではなくて、先生ベースの話だと、今、小木曽様が言われたような、こういった地域のコーディネーターであったりとか、繋げていける人材ですね、これっていうのも非常に重要なのかなっていうのを思いました。ただこの辺の議論も、地元のこういったふるさとっていうことでありますけど、そういうものも大事にしながら、そして一人ひとりが輝いてくる、こんな意見が出て、最後にありましたように他県にはやはり長野県らしいっていう、こういう議論ですね、これは本当にここまでされて議論が具体化してくると、多分それがかなり長野県らしいものになっていくんじゃないかとは感じているところであります。

はい、では安原様、お願いします。

【安原構成員】

はい。あまりそこに関連があるかどうかわかりませんが、最後ということで言いたいことを言わせていただこうと思います。内向きの改革を先ほど申し上げました。教師はやはり宝だと。他県がうらやむような教師の待遇改善などのことを言いましたが、もう一つ外向きの改革として、それはやはり、高校生が生き生きとする、そういう県づくりだと思うんです。

資料３ページの、既に予算がついてると言われました、高校生が自校の魅力や取組を紹介する合同説明会は非常にいいなと思います。例えば、赤荻さんですかね、SNSを使ってと言われましたが、例えばYouTubeを使って、今の子供たちにそういうものを配信させる。つまり、そもそも広報とか、学校作りに高校生自身を参与させて、高校生たちの活躍の場をたくさん見せることが、中学生にとって、あの先輩たちがあんなに輝いてる、ということの証になると思います。例えばYouTubeで各学校の紹介を出してそれをコンテストにしてもいいかなとか。もちろん受験が終わった後でもいいんですが、そんないろんなアイディアが考えられると思います。

そういう、高校生の、広報活動への参加。あと、以前にも言いましたが、高校生会議というのを申し上げました。それも結局同じなんですが、今、座長も言われた長野県らしさというとき

に、長野県というものをどうしていくか、今この会議の前提はやはり今までにない未曽有の少子化の中で、どうしていくかというのがあると思うんです。そのときに、高校生をその議論に巻き込んで、そして長野県を見つめさせる、議題はいろいろあると思いますが、少子高齢化とか、そういうことを議論し考えさせることなどを通じ、高校生の活躍の場をたくさん用意することが、やはり外向きの改革として、長野県の高校生は生き生きとしてるなと思われることにつながるんじゃないかなと思います。はい、以上です。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。

本当に生徒自身が主体的に、一言で言うと、そういう話かと思うんですけど、生き生きと参加、生き生きといろんなことを取り組み、そして主体的に参加できるようなそういう場作りとか高校作りっていうご提案、これ非常に私も大事なところかと思っております。

ちょうど須坂市ですかね、先日２月にうちのところでSTEAMのイベントをやった際に、須坂の高校生とかが発表してくれたんですけど、自分たちの居場所を作るっていうことで、空き家を全部自分たちでリノベーションして、大工さんに教わってそういうのを作っていたっていう非常に素晴らしいものだったんですけど、高校生自身が本当に関わってやっていくと、だからいろんなものを教育委員会も用意するし、学校の先生方も用意するんだけど、全部がそこでお任せではなくて、彼らそのものにどういうふうに活躍して取り組んでもらえるのか、そういうものの提供っていうのは本当に今のお話で重要だなっていうのを感じた次第であります。ありがとうございました。

その他いかがでしょうか。山下様、お願いします。

【山下構成員】

山下フルーツ農園の山下です。よろしくお願いいたします。

私この４回で、教育のことはド素人で何もわからない中で、勉強になったことがたくさんありました。一つ思ったのが、特色ある県立高校作りということで、県立高校それぞれが特色を持つのか、それとも長野県全体で特色を持つのかっていう、二つの視点があるということにも会議の中で気付かされたんですけれども、その一つの中で長野県全体の高校、どこの高校でもどの学科でも、普通科でも専門科でも何か学べるものがあるといいなっていうふうに思ったのが一つ。

あと前回の中高一貫校ですとか高専の話があった中で、長い期間の教育の大切さみたいなものをちょっと感じた部分がありました。そこで保育園から高校まで、一貫して自然教育みたいな、何かプログラムみたいなのが組めないかなっていうのが一つ思いました。長野県、信州やまほいくと言って保育園はかなり自然環境の中で保育をしましょうねって、みんな自然の中で遊びましょうっていうことをやっていて、小学校中学校に上がると、うちの小学校だとリンゴを栽培したりですとか、田んぼをやったりですとか、あと木曽の方では何か植林の体験をしたりとか、かなり自然、その地域の自然環境を生かしていきましょうみたいなものを小学校中学校と経験して、

高校って、ちょっと子供が高校にいないものでどういったことをやられてるかはわからないんですけれども、あの高校の中でもそれをさらに発展した形で、それぞれの子が得意分野だったり、気になる分野っていうところから長野県のやっぱり魅力である自然環境を持続可能なものにするにはどうしたらいいか、どういうアプローチをしたらいいかっていうようなちょっと探究に近い視点としてやると、保育園時代に遊んでいた自然環境を、高校生ぐらいの学びの深い中でも、何かしらのアウトプットを出せるような場を、長野県の教育としてあると面白いんではないかなというふうに思いました。

あと長野県はとても広いので、県内の高校間の交換留学みたいのも面白いのかなと思って、どうしてもあの留学制度っていうと、なんていうんですかね、都会の子が田舎に行ってちょっと農業体験やってみようよとかそういうのもあるんですけど、逆に田舎の子が都会で住むっていう経験を大事かなって思いまして、うちの町とかですと、ピザのデリバリーも来ないUberEatsも来ない、そんなところの子が、やっぱり都会に出て、そういった環境、便利な暮らしの環境の中で１週間過ごすだけでも、結構刺激を受ける部分っていうのがあると思うんですよね。なかなか海外にすぐ留学に行こうとか県外に行こうっていうと予算があったり、お金の面で大変だと思うので、県内の中で、せっかく長野県には広くていろんな特徴がある地域があるので、そういったこともできると長野県の県立高校の特色として面白いんじゃないかなというふうに感じました。以上です。

【村松座長】

はい、ご提案ありがとうございました。

まず前半の方は信州やまほいくといった長野県の自然環境、こういうものを軸に、特色ある教育として高校でもそういうのを繋げていけないかっていうご提案ですね、これは先ほどのふるさと話じゃないですけども長野県の特色として、この自然っていうのは非常に大きな環境でもあると同時に大きな財産でもあると思います。そこをどういうふうに活用していくのかというのは非常に今後検討すべきご提案かというのは思いました。

もう一点いただきました県内の高校間の留学ですね、今日の資料の３ページのところでも、これ前回かその前ぐらいに私も出させていただきましたけれども、学校のこの一校自前主義を捨ててネットワークを組んだらいいんじゃないかっていうお話もさせていただいたと思うんですが、そこにも関わってくるところかなっていうのは思いました。こういった留学は、高校間だと、多分大学ですと単位互換みたいなことで、そういう協定を結んでると相互にいろんな授業っていうのはそれぞれの単位になる。同じような形で、県立高校間でこういうものができれば、制度的にはそんなに難しくなく、先ほどのように寮もあったりというそんなところもありますし、また都市部と県境校との交流みたいな、そういった面白い交換留学っていうのは一つアイディアとしては、ぜひと思いますし、そういったものもぜひ展開できたらと思いました。

はい、岩本様いかがでしょうか。

【岩本構成員】

いまの山下構成員のおっしゃられた交換留学の話で、１点補足というかですけど、私、いま全国の高校での１年間の交換留学をさせていただいているんですけども、全国で22校できるようになっています。これ特に特別な制度が必要とかっていうことではなく、日本で言ったら学校間連携という仕組みを使うとですね、36単位までは他校でとったものを使えるということで出来ますし、仮に必履修科目が、ちょっと留学するとちょっとずれるとかっていうことが、ちょっとマニアックなんですが起きるんですけど、それはいま我々のやっている、これ内閣府と一緒にやってますけど、通信制を活用して、本当に必要な必履修が取れないというふうになれば、通信制も使えるっていうような形でもうできてますので、長野県でも、もう県としてやろうとしなくても、学校がやろうとすればある程度できるっていう状況です。

ですが、今年度の調査でわかったのは、生徒はやりたいとなってもできない一つの理由は、各学校の教務の規定、いわゆる内規と呼ばれるようなものがですね、他の学校の学校間連携を認めていなかったり、全日制の高校が通信制の高校の単位を自分のところの単位としてちゃんと認めるとかっていうことが、日本の制度的にはできるんだけど、各学校の内規上それができないとかですね、大体その交換留学できない内規を調べていくと４つぐらいのパターンが大体出てきてですね、そのパターンをどういうふうに変え、内規をこう変えると、ちゃんと生徒がそういったことできるようになるのかっていう、これもマニュアルというかですね、手引きを今年度作りましたので、また長野県でそういう学校があったり、やりたいってことがあれば、そんなところでも情報提供は今後できるかなと思います。はい、以上です。

【村松座長】

ありがとうございます。非常に貴重な情報いただきありがとうございました。ご指摘いただいたようにやはり各校の内規とか教務ですね、そういうところが障害になってるっていうのは、お話を聞いていて、確かにそうだなというとこですね。これやはり先ほどのように、本当に１校で何とかしようとか、１校で解決しようっていうことは、もうその発想そのものを大きく変えていかないと、いまのような内規の話なんかできませんし、逆にそこができるとポイントがどこかっていうのをお示しいただけるといろんなところの整備っていうのが、非常にクリアに進んでいくんじゃないかなというのは思いました。

これは今後、ぜひですね、課題点としてもご検討いただけたらということを、今お話しお聞きして、感じたところであります。ありがとうございました。

その他関係するところも結構ですし、いかがでしょうか？はい、阿部知事、お願いします。

【阿部知事】

はい、阿部ですけど、遅刻をしてきまして失礼しました。能登半島地震の中部圏各県知事が集まって、応援をどうするかっていう会議があったんで遅刻したことをまずお詫び申し上げたいと思います。

ちょっと私、途中から入ってきて状況がよくわからなかったんで、あまりコメントしませんでしたけど、小木曽さん、安原さんからのお話を受けてちょっと議論した方がいいかなと思う点があります。先ほど小木曽さんから地域連携コーディネーターは誰をおくのか、どういう人がいるのかっていう話はちょっと私も聞きたくて、実際、今、どういう人たちが配置されてるのかっていうことをぜひ教えてもらいたいのと、もう一つに２校をどこに置くかって、これって教育委員会が勝手に決めてるのか学校の要望も聞いているのか、要するに決定プロセスっていうのは、どうなっているのっていうのを今の、先ほどのお話聞いてちょっと疑問に思いました。

で、先日、特別支援学校の子供たちと話し合いをしたときに、これちょっと私の問題意識は、学校の自治権をどう拡大するかっていうことで一貫して問題意識を持っているんですけども、要は学校が本来決めなきゃいけないことを、誰か他の人が、先ほど岩本さんの話にもありましたが、学校が自分で決めてんだけど、だけどそれ、学校がどういう民主的なプロセスで決めてるのかっていうのは一つ問題だと思うんですよね。要するに保護者の意向とか、地域の皆様の意向を受けて、一体そういう内規を作ってるならいいんですけど、ただ単にたまたま学校がそういうことがいいって内部だけで議論して決めてるのはやっぱ公立高校としては民主的じゃないと私は思ってます。

その反面、民主的なプロセスで学校が自主的に運営されなければ多分理想の学校はできないんで、そういうことを考えたときに、例えば県の予算当局であったり教育委員会だったりが、ある意味、余計な関与というかですね、過剰な関与をしているところはないのか、してるんだったら変えなきゃいけないと私は思ってて、例えば私、その特別支援学校の子供たちと話をして、実は、いろんな要望があります。例えば、身体障がいがあるので昇降機をつけてください、あるいは、学校のトイレをぜひ改善してください、といろんな要望があるんですよね。で、私のところで予算編成するときは、実は、分野別の議論しかやらない、要はＡという学校の子供たちが昇降機も欲しいトイレもほしい、あるいは、何かこんな学習したいといろんなニーズがあったときに、予算編成のプロセスにのると、それが相対として議論されずに、昇降機をつけるかつけないか、要するにつけるんだったら何個つけるかみたいな話に、なんていうか矮小化されるというかですね、そんだったら、同じ例えば予算をかけるんなら、もうこの金額分は、例えば私と教育委員会が相談して、例えば学校のトイレ改修に来年1億円つけましょうということをもしやったとしたら、学校によっては、あるいは子供たちのニーズを聞けば、実はトイレよりも昇降機の方がいいというところは、もっとそっちに使ってもいいよとかですね、これちょっと私の権限のところをどう変えるかっていう問題意識で伺ってるんですが、そういうやり方だってあるんじゃないかなというふうに思って、特別支援学校の子供たちとの話を聞いていました。

で、この自治の話でいくと、産業界の皆さんから最近よく出てくる問題意識は、アルバイトをもっとどうしてさせてくれないの、この場でも出たと思うんですけども、それは一体誰が決めてんのと、学校で決めてるんなら学校が産業界の人たちと本当に話し合って、それは合理的なのか合理的じゃないのかって、やっぱもうちょっと判断、地域の皆さんのやっぱり理解を得られる議論が必要だというふうに思いますし、もう一つ、学校を私は、あの教育委員会と、私のような選

挙で選ばれた人間は、実は学校をもっとサポートしなければいけないんじゃないかと思ってて、多分あの学校としてはなんかルールを変えたり、今までやってたことと違うことをして問題が起きたときには、世の中からも総批判をされてしまうということを、多分恐れる部分もあるんじゃないかな。それだったら学校の責任にしないで、これは県教委の方針としてやるとか、あるいは県全体で、政治家として私はこういう方針でやるとか、そういうことをしっかりやって、その中で学校現場でもっとやりやすいようにするっていうやり方もあるのかなというふうに思っています。

そういう意味でちょっと小木曽さんが、うちにはおいてもらえないって話があったということで、その点はやっぱり学校の自治分権みたいなあり方がしっかりしてないと、あの小手先の制度をいじってるだけだと、やっぱり教育ってうまくいかないのではないかなというふうに私は思ってるんで、そこら辺の問題意識も含めて皆さんからいただいた意見を踏まえて、教育委員会とも相談して、今日最終回なんで、ちょっとここでこの話を深めるわけにはいかないと思いますけども、私としての、何ていうか、決意表明という形でちょっと申し上げておきたいと思います。よろしくお願いいたします。

【村松座長】

はい、知事ありがとうございました。

もし地域コーディネーター、何か補足もし事務局であれば、はい。

【事務局：志津高校教育課長】

はい。地域コーディネーターの配置に当たりましては、やはりこの重要性というのは我々も重々承知しております。実は、今年度第１回目の県立校長会のところで岩本様に来ていただきまして、このコーディネーターの重要性、どういうふうにやっていくのが一番効果的かっていうのをお話もいただきました。そのような中で今年度は２つのタイプということで、もう既に先行で実施されていた野沢北高校、ここは今、佐久新校ということで、その新校配置に向けてコンソーシアムを作りながら、新校でやっていくということで既にもう取組をされていましたので、そういうところで今年度県として配置させていただいたところです。

あと池田工業高校の方は、池田町の方で配置をしていただいたコーディネーターさんで、今年からちょっと池田町の予算がなくなるということでそういうお話を受けまして、こちらは職業科のタイプということで、今後ここも再編統合に当たっては、南安曇農業、穂高商業それから池田工業という３科が総合技術高校になっていくという中で、どういう地域とのあり方、それから学校間、学科間のあり方がいいのかというそういうようなモデルケースとして置かせていただきました。

そのような中、来年度の配置につきましては全県の校長に、それぞれの学校でどのように考えるかというアンケートをとりまして、そのような中から、地域連携コーディネーターを置いていくってことの意味っていうのは、それぞれの学校でどのようなタイプにどのようなコーディネー

ターをどう活用していくかというのが様々でございました。そのような中から新たに２校といいますか、追加をしていくわけですが、新たに２人ということで追加をしていくわけですが、少し地域的なものですとか、それから松本市内の４校に関わっている方で、そういう他校に関わっているような方っていうちょっとタイプの異なる方を入れていく、あるいはもう既に県費でなくても、市町村の方で、市の役員、市町村の役員を配置していただいている方とか、様々なタイプのやり方があるので、ここは学校それから地域ともにウィンウィンになるような、そういうようなコーディネーターのあり方っていうのを模索していくということで、来年度は４名４校に配置するってことになりますけども、それを選ばせていただいたということで、これでこういう中から、もう全て県費っていうことが適切であるかどうかそこも含めまして、この４校、来年度になりますけれども、検証もしていきながらということで、残念ながらちょっと坂城高校さんの方で入らなかったということになりますけれども、そこでもまた、どういうその人材バンク等も含めまして、どういうあり方がいいのか、そういう方も来年度検証していこうと考えているところです。

【村松座長】
　はい、ありがとうございました。はい、小木曽様どうぞ。

【小木曽構成員】
　すいません、ここでの発言がどれだけの影響があるのかって、ちょっと今タジタジしちゃってるんですけど、残念だなという気持ちがある中ですけど、自分の中で納得してる部分もありまして、あの坂城高校、少人数を研究する未来の学校の構築事業っていう中で、そういう連携も試みていくっていうところでは予算立てがあるので、そこは多分二重になることはあまりないのかなっていう理解もある中でなので、とても恨んでるってことではありませんのですみません。はい、ありがとうございました。

【村松座長】
　はい。ご理解いただいているということでございます。

【阿部知事】
　はい、私ばっかり話しちゃいけないですが、今のお話をちょっと研究課題にさせていただきたいと思いますけど、安原さんがおっしゃっていただいた高校の合同説明会、これ実は飯田女子高の生徒と私が話したときに、もう既に自分たちでやってると、これぜひ行政も一緒にやってほしいということで、教育委員会に頑張って予算化をしてもらいましたんで、おっしゃるようにできるだけ子供たちにも参加してもらって主体的にやっていきたいなというふうに思ってますし、これから少子化人口減少の議論は県民の各界各層の皆さんとやっていかなきゃいけない中で、ご提案いただいてるような高校生会議も、ぜひ教育委員会の協力を得てやりたいと思ってます。

それから山下さんにおっしゃっていただいた信州型自然保育の子育てされた方と話をして、よく言われるのは、せっかくやま保育で育てたのに、小学校行ったら普通の学校になっちゃったということをよく言われますので、そういう意味ではお話いただいたように、こうした一貫したプログラムを組めないかっていうのは、真剣に考えなければいけないと思います。

あと高校間の交換留学っていう話もありました。私ちょっとそのことも重要だと思いますし、もう一つは高校生が、自分の最初に選んだ学校が自分に合わないと思ったら、本当は公立学校間くらいはですね、もう少し柔軟に学校を変えられるようにできないのかなというふうに思ってます。これって無理なんですか、これちょっと教育委員会に教えてもらえればと思いますけど、少しこの辺、高校教育の枠組みをかなり外れる部分も入ってるんで、今、学び円卓会議並行してやってますんで、そっちでもしっかり議論していきたいと思ってます。ありがとうございます。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。短期留学というよりはもう転校のお話かと思うんですけども、その点だけに絞って教育委員会の方でお話いただいてよろしいですか。
はい。内堀教育長お願いします。

【内堀教育長】

いま知事ご指摘の点は、多分高校入試との関係があるのかなというふうに思っています。ですので、高校入学で検査を課して入学しているものと、途中で転学するものということの整合性が１つあるかなというふうに思っているところです。あとは長野県の場合は、例えば東京なんかと違いまして、転入の枠何名というようなことを決めていないんですね、これまで決めてこなくて、例えば東京あたりのホームページを見ると、３名まで転入認めますみたいな学校ごとの数字があるんですけど、長野県の場合は地区ごとに事務局校みたいなのを設けまして、そこへ転入してくる方の希望ですとか状況だとか、あるいはいろんなものをお聞きして、だったらこの地区だとこの学校がありますけどっていう仲介的な役割を果たすような仕組みでずっとやってきてますので、それが全て正しいとは思ってないんですけど、そういったものを変えていくこととなりますので、その辺のところが必要かなというふうに思ってます。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。

先ほどいただいた今のお話、それから先ほどの話も含めて、これは結構大きな話でありますし、またここでちょっと深入りして、掘り下げるのは難しいかと思いますけど、今ご指摘いただいた課題ということで、留めておければと思います。また、知事の言われた後半の方の学校の自治をどう拡大するのか、そういったこの予算執行等の自由度とともに、各校の自治権、こういうものがどのように保障しやっていくのかっていう、言ってみれば規制緩和みたいな部分もあるか

と思うんですけど、この辺も合わせて、今後のぜひ検討課題としていただければと思います。ありがとうございました。

それではどうでしょうか。もうだいぶ残り時間も見えてきたところでありますけど、じゃあ堀井様よろしくお願いします。

【堀井構成員】

白馬インターナショナルスクールの堀井です。よろしくお願いします。

今、ちょっと円卓会議のこともありましたが、最初にインフォメーションですが、５月にうちの白馬インターナショナルスクールの方で円卓会議の意見交換会をやらせていただくことになりましたので、もしよかったらいらしていただけたら思っております。

今日ちょっと資料を出させていただいたんですけど、前回右脳で喋ってしまったので、今回左脳で喋ろうかなと思いまして、今日の皆様のお話が各論だったので、このお話は少し切り口が違うので、お話がずれてしまったら失礼します。この会の最初にお話したのが、学校が楽しくて月曜日が待ち遠しい生徒はどのぐらいいるんでしょうかっていうことを皆さんに問いかけをさせていただいたところから、私がそこに課題を感じてるっていうこと。それからいろんな学校の特色を作ろうという皆様の意志と、とは言え長野県は広くて、行きたい学校が通学圏にあるとは限らないという課題があるとか、いろいろ教えていただきました。とは言えですね、全国的な少子化で生徒の奪い合いを他県とするのも、とかということも疑問を持ちました。実際、この15年で出生数が30%も減少していますので、15年後に同じ体制で高校が維持できないというのは明白でしょう。それも理解できた上で、長野県の高校の特色を考えたときに私、割と一貫してお伝えしてたのは、県としての特色っていうのを何か打ち出したらいかがでしょうかっていうご提案でした。

世界の人々を魅了する素晴らしい環境があって、それを活かしたり、保全したり、国内外から、魅力のある場所として進化することを念頭に、ここの特色化を考えたっていうのが最初の上の部分でピンクの部分と緑の部分を作ってみました。長野県の県立高校を考えるときに、どういう皆さんの役割があるのか、あまりよくわかってはいなかったんですけど、なるほどと、行政のプロの人たちと、それから教育のプロの人たちがタッグを組むんだなっていうように思いました。なので、ピンクの方が行政のプロが、そして緑の方は学校のプロが担当するっていう、そんな図にしたんですね。

先ほど、鳥谷越先生とか、あるいは小木曽先生とかもおっしゃってましたけども、学校の先生ってやっぱりすごくプロなんです。今、いろんな学校のいろんな方から学校作りを相談されることがあるんですけど、やはり、こういうことが必要、ああいうことが必要っていうのは学校の先生だったら当たり前にできることはやっぱり一般的にこれから学校作りたいっていう人はなかなかわからないこともある。逆に言えばですね、学校の先生ってそのぐらい、もう自然にプロで、自然にやれて、頑張ってやってきた結果が積み重なってる、そういう人たちだなっていうのを、私が教員になったときからもちょっと思っていました。今回ですねこのピンクと緑の部分で書か

せていただいた、ちょっと緑の部分で教育のプロフェッショナルの方々には割と基礎的な話なんですけど、どのぐらい学校特色できるのかなっていうさっきのカリキュラムの問題があったりとかですね、他校に転校するには、単位の問題があったりっていうお話もあって、通信で何とかするっていうのは素晴らしいことだと思うんです。もう実際、あの長野県内でもいろんな学校でこれはやってらっしゃいますけれども、いわゆる英数国、皆さんご存知の人もいらっしゃると思いますが、一応基礎的なお話ですけど、英数国とかっていう科目以外にもですね、もうそれぞれの学校さんが実は学校設定科目っていうのを持ってまして、その学校の特色に合わせたものっていうものを作れるっていうことになっています。

これ普通の高校でもこれだけできるんですけど、次のページにいっちゃいますと、中高一貫だとさらに単位数が増えてですね、もっと自由度が上がってきます。すいません、私、これ学習指導要領が今の学習指導要領を改定するぞっていう2019年のときに研究したものなので、ちょっと何か間違ってたら、あの現場の方で直していただく方がいいかなと思います。実際この間お伺いした上田高校でも学校設定教科科目60単位もあってですね、しかもその多くは割と各教科の応用科目、学習のための科目が多いんですけれども、すごく特徴的な、グローバルスタディーズっていう教育課程表に書いてあるんです。ＷＷＬをやったり、あるいは高大連携をやったりということを単位化しているっていうこと、すごい特徴的なことを具体的にやっていて、しかもですね、長野県の先生っていうか教育行政の方々もですね、この国の、あの教育課程特例校にもちゃんと申請をされて、それ認められているようなそういう情報ですね、活用できるスタッフがものすごい尽力されているっていうこともすごく学びました。

こういったように、柔軟に学校の設定科目っていうものが、カリキュラムで作れるので、私ども白馬インターナショナルスクールでも実践しておりますプロジェクト型っていうものをですね、どんどんやっているようにすればいいなと思います。先ほど、今までの農業科や、あるいは福祉科だとかいろんな特色のある科みたいなお話があったけど、果たしてそれが１校で大丈夫なのかとか、遠くにあったらいけないとかあったと思うんですけど、あと、鳥谷越先生がおっしゃってた普通科の意義っていうのがすごくあるっていうお話もあって、私も本当にそう思っていて、高校時代に、果たしてこの進路がどこまで決定するかとか、そのカリキュラムが合うかっていうのはなかなか分からないとなったとき、次のページ、特色学科のための教育課程として、実は、例えば学校設定科目をプロジェクトの中心として、プロジェクトを中心として構築することをするならば、毎日午後はもうプロジェクトだけやれるような学校っていうのは、やっぱりできるんですよね。それをやって、しかもいろんな学校さん、伊那小中さんなんかもそうですし、あとはいろんな学校で、いろんなプログラムを構築するように頑張ってらっしゃいます。例えば長野県だったら環境っていうプロジェクトを、いろんな教科とフィールドワークだったり、いろんなことを学校設定科目の中に入れることができるなと思って、簡単にシミュレーションしてみたんですね。

その中で、長野の先生ってすごくて、実はプロジェクト学習の先駆的学校であるサンディエゴのハイテックハイという学校があるのですが、そこに2018年にはもう研修に行かれて、PBL研修

を受けて実際学んでいらっしゃる。これなかなか公立の先生にそこまで勉強される方っていらっしゃらなくて。去年も私ども学校に研修参加してくださった方がいて、もう本当に長野県の先生たち、いろんな先生、そんなにたくさんではないですけどお会いしましたが、本当に素敵な腕のいい先生たちばかりしかお会いしてないぐらいだと思うのです。なので、教科だけでもすぐにPBLできるし、さらにもう既に長野県の校長先生たちが学ばれたと聞いたのですが、システム思考、MITのシステム思考だとか、上田高校では、あるいはマイプロとかでも、デザイン思考とか、そういったものを皆さんご存知で、それが組み込まれているのです。

そして何といっても、今このウェルビーイングってことを掲げられていらっしゃるのですね。だからこういった、既にある英知、実際いろいろやってらっしゃるものを組み込んで、各地域、エリアに１校ぐらいこういった学校を作ってみたらどうでしょうかっていう提案として、こういうことを書いてみました。

最初はプロジェクトをいっぱい回して、楽しく、私は学校は楽しいだけでいいのではないかと思うぐらい、楽しさっていうものがあると思うのですけれども、その学校を作ることも、先生方も、こちらにいらっしゃる方も、教育委員会の方も、楽しむっていうことを掲げて学校を作っていったり、あるいは生徒たちと一緒に生徒たちも楽しめるような環境を作るっていうことから、そこから掘り下げて、２年生、３年生となると、どんどんアカデミックな探究になるっていうのを考えてはいかがでしょうかっていうものを、こちらに掲げてみました。

その中で、今日も待遇のお話とかありましたけれども、先ほど知事の方からバイトのお話もあったと思うのですけど、90単位全部やらなくても、74単位で卒業できるのだから、もうちょっと余裕のある時間割作ってもいいんじゃないかなと。例えば水曜日は３時間目で放課してしまい、午後は先生たちも全部解放、生徒さんを解放してしまい、先生たち同士の対話が生まれたり、あるいはプロジェクトのチューニングをしたり、生徒さんはその日はしっかりバイトをしたり、あるいは自分の学びに没頭したりという、そういう自由な時間があってもいいのではないかなとか、そういったところからできてくると思います。次はもう思い切って、３時間目１年生はありません、そこは自分たち自由に何してもいいです、ということで学年でずらすことによって、先生方がカリキュラム、時間割作るのがすごく楽になったり、そういったことを、自分がずっと学校を経営していたものですから、どんなところにネックがあるかっていうあらゆるところも一生懸命総動員してちょっと考えてみました。

先ほどのプロジェクト、例えば白馬インターナショナルスクールでやっていることをご紹介しますと、私どもの学校は５学期制でして、１学期ずつ、全部１個ずつプロジェクトをやります。例えば愛についてとか、それからあとはアクティビスト、要するに活動家ってどういうことなんだろうっていうことを中心テーマにして、あと学校を作るってことをテーマにしながらその周辺のことをいろいろ学習するっていうことをやっています。長野県の先生でしたらそれができる先生方はたくさんいると思うのでその教育のプロの人たちで、この“Yes and”でプログラムを作る、すみません、“Yes and”ってどういうことかって言うと、私よくこれをワークショップでやるんですけど、「それいいね」って言った後に「でもさ」っていう課題を見るよりも、「それ

いいね」って言って、「そしてこれをこういうふうにすればいいよね」っていうような思考で、ちょっと楽観的かもしれませんけれども、楽しく学校作りをすることをご提案差し上げたいと思います。

一方で、次は行政のプロの方たちがどうするかっていうと、今回産官学みたいないろなことがもう既にやられているとは思いますけれども、よくある話は先ほども少子化の話ですけれども、学校を統合します、統廃合するとですね、よくあるのが全国的に起こっていることなのですけど、比較的よくあるのは地の利のいい方の学校が割と残って、そうじゃない学校が廃校利用に出されます。今もう文科省のリストにずらっと並んで何年も廃校のままの学校がいっぱいあったりするのですよね。これだけ人口が減少しているのに廃校利用って言って、新しい学校を作りたいです、私立学校廃校利用で、なんてお話もいただきます。しかしそもそも人口がいないから廃校になっちゃったのでそこで私立学校を経営するのは非常に難しいっていうお話によくなります。なので、廃校にするのではなくて、先ほど言った長野県ならではの産業振興や、あるいはインバウンドさんの誘致などで、長期滞在の外国人が住まわれるとか、あるいは私のような多拠点居住者みたいな人がいろんなところで働くとか。それから地域交流ができる場所であったり、あるいはシェアハウスを作るだったりとか、起業家さんや就農希望者の方って最近若い人も多く増えてきたと思うんですけど、安価のオフィスや安価の畑を作って、あとはですね、こういう環境ですと、音楽家の方とか芸術家の方がですね、しっかりと自分の作品に向き合えるような場所を安く提供するっていうことを、学校の敷地内に生徒を統合するのではなくて、生徒が少なくなってきたなと思っても、もっともっといろんな人が学校の利用ができるように考えてみたらいかがでしょうか。それから先生と学習しているところでもしかしたら食堂か何かがあって、地域の方がそんな人口減少すると、経営難しくなるところで、ご飯の提供を学校の人も、それからそうじゃない人も一緒になってご飯を食べるようなことをするとですね、先ほどの時間割を使ってですね、隙間の時間で交流をするみたいなことを妄想すると私は止まらなくなりまして、今回皆様に、こういうふうに提供差し上げたという次第でございます。

なので、私は悲観的になるとだんだん病んできてしまいますので、楽しくみんなで作れるような環境をということを最後にプレゼントということでお話させていただきました。長々とありがとうございました。

【村松座長】

はい、ありがとうございます。非常に熱意のあるご意見をいただきありがとうございます。今のお話をいただきました教育と行政のプロがタッグを組むっていうのは、やっぱりいろんな、この地域コーディネーター、いろんな話とかも含めて、多分これ共通している部分かと思います。そして今一番メインのお話だったのが、学科ではなく、PBLのプロジェクトベースで取り組んでいくと、最近ですと渋谷区さんとか、午後は全部プロジェクトにやるなんてのは大きなニュースになりました。途中でもいただきました長野県が非常にプロジェクトのPBLで先進県であると、これ、多くの皆さんがご存知だと思う、歴史的にはもう、大正時代からこういったプロジェクト

ベースのことっていうのは非常にやっていました。そういったことも本当に背景にあって、まさに教育県長野というのがあったかと思うんですね、そういったもので、非常に今いただいたお話も素晴らしい先生方がいるじゃないか、そういうものをうまく進めていければと、そのために柔軟な教育課程の運用や廃校の活用みたいな具体的な話もいただきましたけども、今いただいたPBL、言い方を変えると探究の取り組みっていう話になるんですけども、これ現在まさに県の方で掲げている教育基本計画の一番根幹の部分であるなというのを感じております。この辺をどう実際に実装していくのかっていう、ひとえに運用っていったときに、教育課程の話とか様々な課題が当然出てくるかと思いますけれども、方向感としては県全体としても非常に大事にしてるとこかっていうのをお話聞いてて感じたところであります。ありがとうございました。

その他、だいぶ残り時間も少なくなってきましたが、じゃあ赤荻様お願いします。

【赤荻構成員】

渋谷女子インターナショナルスクール校長の赤荻です。今日は最後っていうことなので、ちょっと提案というか、私の思いを少しだけお話させていただければと思います。私が校長になって１年経ちまして、SNS等でも、あの渋女の校長っていうふうにPR活動頑張ってきたので、ちょこちょこSNSを通して全国の中学生の方から相談いただいたりとか、あとは対面でも、全国の中学生の子と会っていろんな相談をこの１、２年で受けてきました。中学生の相談が主なんですけど、県立高校行ってもなんか馴染めないだろうと思って、私立だったり通信を選ぶ子を見てきました。地元を飛び出して、親元も離れてお金をかけて上京したいっていう子もいました。というのも、地元に趣味のあう友達がいなくて、SNS上でしかお友達がいないだとか、また、やりたいこと、チャレンジしたいことを地元では白い目で見られるだとか、そんな子がたくさんいたんですけど、今渋谷女子インターナショナルスクールでやってみて、１年経って全国からいろんな子が、好きなこととか夢がバラバラの子が集まって、どうなるんだろうと思ってたんですけど、なんかみんな価値観が違うのが当たり前だと思ってるので、すごく生徒たちの仲が良くて、あぁこうなるんだってこの１年通して思ったんですけど、全国の中学生と関わってみて、地元でも、夢とか趣味とか好きなことを言いやすい、目指しやすい環境を作ってあげてほしいなと感じました。

それもうちの学校って、自由で楽しいよっていうところにも繋がってくると思うんですけど、なので、好きなことを突き詰める時間を作るっていうか、具体的なご提案ができないんですけれど、例えば私が中学生の頃とかだったら、朝読書の時間とかってありましたよね。その時間を、自分の好きなことを突き止める、何かスーパーオタクタイムみたいな感じで、好きなことを学ぶ時間にしたりとか、具体的じゃなくてちょっと申し訳ないんですけど、何が学べるか、カリキュラム以外の部分でも、何か多様性をがっつり認めますみたいな、ウェルカムな雰囲気が作れたら、もう県立高校を選ぶ子が増えるんじゃないかなと思います。

また、私も全部で５回懇談会に参加させてもらって、長野県の大人の方たちは、すごい器がでかくてかっこいいなと感じたので、長野県の学生の方たちにもそういった長野県の大人の方たちの熱い思いが伝わったらいいなという思いです。

すいません、ちょっと提案とかじゃないんですけど、後悔ないように言わせていただきました。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。

先ほどの堀井様のプロジェクトの話にもちょっと関係するところかと思いますけれど、好きなことを突き詰めていく、こういう時間を設定していくと。スーパーオタクタイムというお話を聞いて、なるほどと思ったところでございます。

この辺も、「好きをトコトン」っていうような、今、掲げている方向性とも非常に合致してるところでございますので、これは本当に先ほどのお話の、どのように具体化していくのが実装していくのか、この辺が課題かなと思いました。それで最後にいただきました長野県の器の大きさというのは、私もこの５回の会議をとおして非常に感じたところでありまして、お陰様でいい議論ができているかと思います。ありがとうございました。

さて、残された時間非常に限られてまいりましたが、どうでしょうか。はい、岩本様。

【岩本構成員】

すいません、最後ということで私もいただいた資料３ページで県教育委員会の考え方で今後の方針というところに、６年度の上半期にこの県立高校の特色化に関する方針を決定するということですので、ちょっと今後のところで、ぜひ教育委員会と知事もしくは知事部局の方で、この観点をちょっと検討いただけるといいのではないかということを最後に申し上げて終わりにしたいと思います。

おそらく普通に行くと、各一つ一つの施策だとか事業とか、場合によってはこの学科どうするのかという個別の話が今後なされていくんだと思うんですけども、だんだんやっていくと、おそらく木を見て森を見ずになっていくというか、これは良かった、この学校はこれでよかったねとかっていうことはあるとは思うんですけども、長野県立高校は本当に魅力や特色を発揮していっているのかということがちゃんと見えるかどうかというと、それだけではわからないと思っています。

何を申し上げたいかというと、何を本当に目指していたんだっけ、いるんだっけということと、その指標をちゃんと設定をした方がいいのではないかと、評価の指標ですね。といいますのは、評価の指標といったとき、今までの議論でいくと、やっぱり入口と、中の話と、出口っていうのがあったかと思います。

入口で言えば、長野県の子供たちは長野県立高校をどれだけ選んでいるのというところなんだと思います。要は、長野県の子供たちが、長野県立高校ではなくて私立の方に、例えば、より行

っているとかですね、場合によっては県外の方にこのぐらい出ていってるとか、最近、先ほどもお話ありましたけども、民間の、長野県に本校を設置していない広域通信制高校にこれだけ流れていっているというような状況で、要は、県立高校離れがどんどん進んでいっているのか、それか、ちゃんと長野県の子たちが、長野県立高校を選ぶ割合っていうのは、今増えていく方向にちゃんとその政策全体で行っているのかというようなこと、もしくは県外からも来る生徒の方が増えてくるとか、そういった森をちゃんと見てですね、この県立高校全体として本当に機能していってるのか、それか、どんどん役目を渡していってるというか失っていってるのかっていうその大局観をちゃんと見られるようなところ、入口の指標っていうのは一つ、そういったところになるのかなと思います。

中身のところでいけば再三出てきてましたけども、やっぱ生徒がその中でウェルビーイングですね、幸せ信州ですか、とか満足度、楽しいとかですね、そういったところが全体として本当にどれだけ実現していっているのか、して行けていないのかということを、ある程度大局的にも、あと個別にも見られるような、そういった評価の指標というところで、私の財団でも今、10万人ぐらい日本の高校生使ってもらってますけれど、ウェルビーイングの高校生自体の評価とかですね、あと教職員のウェルビーイングとか、学校の土壌みたいな、どれだけ楽しいかとかですね、心理的安全性があるかとか、そういった評価システムなんかもありますので、場合によってはそういった情報提供をさせていただきますし、そういった中身のところをちゃんと見ていくということが中の話。

出口に関してはおそらくこの会議の中ではコンセンサスはとれなかったのかなと思っています。要は、どういう進路希望を実現できる状態を県立高校がさらに強化していきたいのかというようなところにおいてはですね、まだこれちゃんと世界に羽ばたいていける例えば海外進学とかですねそういった子たちがもっと出られるような、長野県立高校作っていきたいなのか、これからの産業を考えたらデジタルだとかですね、理系とかそういったところにもっとちゃんと行けるようにしていきたいのかとか、起業みたいな話もあったかもしれないですが、県内進学なのか県内就職なのかとか、どの方向性を長野県として強化したいのかっていうのはここでは議論がどっちっていうことはなかったと思いますので、そこ自体を設定するのかしないのかはおまかせというかですね。知事と教育委員会との考え方になると思います。そういった場合によっては、まだできていない進路希望の実現をちゃんとできる県立高校をつくっていくというような発想も、出口という視点に関してはあるのかなと思います。いずれにしろ、入口と中と出口のところで、本当にこの県立高校の特色化・魅力化は、ちゃんと機能しているのかという評価が、県民を含めてちゃんとできるという形を、今後の方針決定するときにはですね、場合によっては検討していただけるといいのかなということを最後申し上げて終わりにしたいと思います。以上です。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。

いろんな、各論等ですね、具体的な議論に入ってくるとどうしても各論に入り込みすぎてしまって、全体を見る必要性があるっていうのは、重要なご指摘だったかと思います。

そして出口問題とかも含めまして、これ何を目指すのかそのまま評価指標とのリンクですね、それも含めてそこの検討性方向性の検討というのは、これは大きな宿題になろうかと思います。

もしかしたら発言のタイミングで入れなかったかもしれませんが、荒井先生いかがでしょうか。

【荒井構成員】

最終回ですので私からもいくつかコメントさせていただきます。

まず前提として、学校の特色化に伴い、何か同時に「止める」という観点もどこかで持っておく必要があると考えています。現在、教育現場はビルドアンドビルドになっていて先生方にとっては通常業務を行うだけでも相当程度の負荷がかかっていると思われます。先ほど知事の発言にもありましたが、自治のあり方を考えたり、新しいことのチャレンジを促すためには、当然「余白」が必要となるわけですが、現在、様々なチャレンジを行う際のリソースが教育現場には圧倒的に足りていないと感じています。この意味では、「特色化」の名の下で、「荷物」を増やしていくのでは、持続可能な仕組みとならないのではないかと危惧しています。それでは、これから個別的な論点と、今後の課題についてコメントさせていただきます。

まずは個別的な論点です。資料３ページ目にある「県の教育委員会の考え方」に記載されている項目ごとにコメントします。１つ目として、「これからの時代の高校の姿とそのための体制作り」の箇所では、先ほど岩本委員の発言と重なりますが、既に地域連携コーディネーターが２校配置されている点、そして全国募集を行っている高校が２校あるという実績を踏まえて、次の一手のためには、現時点での効果検証をしっかりすべきだと思います。当然のことながら、地域連携コーディネーターの設置、全国募集の実施が自動的に良い結果を約束するわけではありませんので、運用上の課題をきちんと明確にしてスタートいただきたいと思っています。これにより将来的に、地域連携コーディネーターを全校配置していくということを検討していく際に計画的な配置のためのエビデンスになるのではないかと感じています。

次に、【３】の「どの高校でも希望の進路を実現」という点と関わって、従来から県立高校の様々な取組やチャレンジがなかなか子どもたちや保護者、地域住民の皆様に「見える化」されていないということは、何十年もずっと言われていることだと思います。こうした意義ある取組が残念ながら理解されていないという点が課題であると設定するならば、広報戦略や情報発信のあり方についてしっかりと検討すべきだと思います。例えば、情報発信の媒体・メディアに課題があるのか、情報発信の方法の課題なのか、発信の頻度が足りないのか、そもそも需要者が求める内容を発信できていないのかなど、きちんと精査すべきです。さらに、発信主体についても、引き続き各学校の自助努力に委ねるのか、県教委が舵取りしていくべきなのかも検討課題の一つかと思います。今回の懇談会で議論されたアイディアが次年度以降順次具体化されていく際に、結局「理解されていない」「見える化されていない」といったこれまでと同様の「困り感」や子ど

も・保護者や地域住民の皆様からの「声」が出てしまうという結果にだけはならないようにしていくための工夫が必要だと思います。

次に、今後の課題についてコメントさせていただきます。

一つ目は、「県立高校の特色化に関する方針」についてです。３ページ目の上段に、令和６年度の上半期に、県立高校の特色化に関する方針を示すと記載されているので、期待しておりますが、この方針の「示し方」に関しても、ぜひ工夫していただきたいと考えています。やはり伝わらないと意味がありませんので、内容はもちろんのこと、示し方、見せ方もこだわっていただきたいです。さらに、方針を出す上では、学校づくりの当事者である高校生にもぜひ参加いただくべきだと感じています。

二つ目は、各論ですが、地域連携コーディネーターの配置と関わって、これまで基本的に高校１校に地域連携コーディネーターを一人配置してきたかと思いますが、今後は、例えば、１地域に１連携コーディネーターを配置し、複数の高校の関係性をコーディネートしていくという運用もありうるのではないかと考えています。さらに連携のあり方という点からは、例えば、県内に高校や高校生を応援したいという思いを持ってくださっている方がたくさんいらっしゃるかと思います。そこで、「高校・高校生応援バンク」のような検索性のたかいデータベースやポータルサイトを作って利用に供していくのも一案かと思います。

三つ目は、今回の懇談会ではあまり話題になりませんでしたが、高校段階における教育相談の充実等は引き続き力を入れていただきたいと考えています。

最後に、今回の懇談会では、「入口」と「真ん中」と「出口」の話がありました。「入口」に関してはやはり高校入試制度のあり方の検討は不可避です。次年度新しい制度がスタートするかと思いますので、制度変更に伴うインパクトもぜひ効果検証いただきたいです。また「真ん中」という観点と関わって、現在高校に通っている現役の高校生は、在学中はとても楽しい日々を過ごしている可能性もあると感じています。在学中の高校生の満足度についても目配せしていくことが教職員の皆様のモチベーションにも繋がるのではないかと思います。

私からは以上です。ありがとうございました。

【村松座長】

ありがとうございました。

前半でいただいたお話は、特色化を進めるための余白作り、それから地域コーディネーターの効果検証、情報戦略に向けて、要は戦術というかどのような戦略ですね。
県全体としてこういった政策を進めていくうえで、どうやって戦略的にやっていくのかっていうことをきちんと考える必要があるだろうと、そういうご提言かと思いました。

またその見せ方の工夫であったり、議論そのものに高校生も参画する。教育相談の充実とかですね、最後の評価のところで、あまり絞らないことが非常に今後を考えて良いのではないか、そんなお話をいただきました。ありがとうございました。

もう議論の時間もなくなってまいりましたので、今日のお話をざっとだけ振り返ってみたところで、オブザーバーの知事、それから教育長にお話をいただければと思います。

今日のお話では、高校生の活躍の場を作るとか指導法の充実など先生方生徒の話とともにですね、先生の価値を高める魅力化の話もございました。また自然など特色ある教育プログラムとかプロジェクトベースの探究の学び、そのための教育課程のお話等をいただきました。

その一方で、学校そのものの連携というようなことで、通信制とかフリースクール、塾との連携の活用、それから高校間での留学制度や、小規模ネットワークなど１校主義から脱却してどうやって連携していけばいいのか、そしてそういった学校を支える仕組みとして、そのスクールロイヤーとか働き方、特別支援校コーディネーターなど様々やってるんですけどそういうものが知られていない、そういうようなものをやって、先ほどの情報戦略ですね、これを考えていく必要があろうと。

そして効果検証を踏まえた地域連携コーディネーターの育成の仕組みとか受け入れ態勢をこういうものは今後必要であろうと。そして評価指標などの仕組み、学校の自治権拡大、内規などの規制緩和といった大きなレベルでの議論ですね。

こういったところが今後必要だろうということで、いろいろまだまだ議論しきれないところはありますけれども、今回のこの議論の中で県の器の大きさの話がありましたが、様々ないろんな多様な意見をいただいたことかと思います。まだゴールではございませんがこの先、ぜひまた進めていければと思います。

それではまずオブザーバーである知事から、最後、一言お願いできればと思いますが、よろしくお願いします。

【阿部知事】

はい、どうもありがとうございました。

今日が最後ということで、若干皆さんからいろいろ活発なご意見いただいてるんで、何とも残念で寂しい感じがしますが、先ほどちょっと申し上げましたが、県でもう一つ並行して信州学びの円卓会議っていうのをやっています。ここの会議は県立高校限定バージョンでありますけれども、学び円卓会議はもう全部、教育学び全体の議論をやっているので、皆さんからいただいてるご意見はそちらとも共有させていただいて、この県立高校のところだけでは受けきれない話も今日もかなり出ていたと思っていますので、そっちの議論にも役立てて行かせていただけるとありがたいと思ってますし、学び円卓会議はフルオープンでやっていますので、また皆さんにも必要があればご案内させていただきますんで、傍聴、参加いただければありがたいというふうに思っています。

私としては、教育委員会が取りまとめていこうとしている特色化の中に、いただいてるご意見の中では、一つは、個別の学校の特色もさることながら、長野県立学校はこういう学校だということをもっと明確に言えるようにっていうお話が出てました。これちょっと私教育委員会の立場とちょっと違うので、やっぱり県としてこれからの地域のあり方、どうやって人を引きつける地

域にするのか、どうやってどういう教育をやって地域を牽引し、日本を引っ張る人材を作るのかを考えるわけですが、やっぱ長野県の高校はこういう高校だということをぜひ言えるようにしたいと思いますので、内堀教育長はじめ教育委員会の皆さんとぜひしっかりそこは考えていきたいというふうに思います。

それからその一方でやっぱり個々の学校の特色作りということも皆さんからいただいたご意見も踏まえてしっかりやっていく必要があるというふうに思います。

赤荻さんにご参加いただいて改めて、どうやって女性、若者に選ばれる点を作るかっていうのが長野県の最重要課題ですが、渋谷女子インターナショナルスクールのホームページ見るとやっぱり行きたくなりますよね。多分ですね長野県の女の子も、こういうスタッフとか、こういうコンセプトの中で楽しく学びたいっていう人が、かなりの割合で私はいるんだろうなというふうに思います。

そういう意味では、なんていうか既存の高等学校のあり方っていう枠組みを、ある意味もうちょっと乗り越えないと、今の子どもたちが楽しいな、あるいは堀井さんが言うように早く月曜日が来て登校するのが待ち遠しいなというふうにはなかなかならないと思うんで、ちょっとそこも現場の先生方の思いもくみ取りながら、ぜひ一緒に子どもたちが行きたい楽しい、こういう学校がどんどんできるように取り組んでいきたいと思いますので、皆さんに本当にいろんな貴重なご意見をいただいてありがとうございました。しっかり生かせるように取り組んでいきたいと思いますので、よろしくお願いします。ありがとうございました。

【村松座長】

阿部知事ありがとうございました。

それではですね、今回が最後ということで、主催者であります教育委員会を代表しまして、内堀教育長からお願いできればと思います。よろしくお願いいたします。

【内堀教育長】

本日は長時間にわたりましてご熱心にご議論いただきまして誠にありがとうございました。また冒頭でも申し上げましたけれども、昨年６月に立ち上げたこの会、５回にわたりご出席を賜りました。本当にそのことについても、重ねて御礼を申し上げたいと思います。

これも冒頭で申し上げましたけれども、今日頂戴したご意見も含め、教育委員会の中で整理し、知事部局とも連携しながら方針を決定し、学校作りや予算要求に繋げていきたいと思ってるところです。

今日の議論の中でも出ておりましたけれども、昨年３月に長野県第４次教育振興基本計画というものを策定いたしました。目指す姿として、個人と社会のウェルビーイングの実現、一人ひとりの「好き」や「楽しい」、「なぜ」をとことん追究できる「探究県」長野の学びを掲げておりまして、これが最上位の目標であることは高校再編においても変わりはございません。ですので、そこを一番上の目的と言ってもいいんですが目指す姿として掲げながら、今日いただいたよ

うな個別の学校の特色化ですとか、県全体の高校の特色化そういったものを図りながら、この個人と社会のウェルビーイングの実現に向けて教育委員会として更に精進していきたいと思っているところでございます。

本当に１年間にわたりありがとうございました。これで終わりですけれども、引き続き、もしこんなこともちょっと言いたかったなとか、あるいはこんなことをちょっと考えてみてくれないということがあれば、まだ検討を我々してますので、ぜひお寄せいただければありがたいなというふうに思っています。

本当に１年間にわたり、熱心なご議論いただきましてありがとうございました。

【村松座長】

内堀教育長ありがとうございました。

こちらの方でも司会として十分皆さんの議論を全て引き出すということはできなかったかもしれませんが、今お話いただいたように、今後ともぜひ共に進めていければと思います。

ここまで本当に皆様ご協力ありがとうございました。以上をもちまして本日の会議事項は終了となります。事務局に進行をお返ししたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【事務局：今井高校改革推進役】

本日も本当に活発なご議論をいただきまして本当にありがとうございました。

事務局より２点連絡がございます。

今、教育長からも確認がございましたけれども、本日いただいたご意見も含めて、今後県としての方針をまとめてまいりたいと思っていますので、もし、まだ本日言い足りなかったことがありましたら、メール、あるいはファクシミリ、電話と何でも結構ですので、とりあえず３月末までに事務局までいただければというふうに思います。

また議事録につきましては、県のホームページに公表する予定です。皆様には事前に掲載内容のご確認をいたしますので、こちらの方もご協力をよろしくお願いいたします。

本懇談会は今回が最終回でございます。構成員の皆様には１年間にわたって大変な貴重なご意見をいただきまして、誠にありがとうございました。

以上をもちまして懇談会を終了いたします。ありがとうございました。